

翻訳をめぐる

関西大学 社会安全研究センター 小澤 守

著者は退職の数年前から日本ボイラ協会発行の『ボイラ研究』にボイラ技術史の連載を行っている。その執筆過程で幕末期に西洋の技術がどのように我が国に取り入れられ、どのようにして我が国産業として定着していったのかに非常に興味があり、様々な資料を収集してきた。英国、米国、カナダなどの諸大学及びGoogleは100年以上経過し著作権の切れた図書をデジタルアーカイブとして広く公開しているし、また単純にコピーして製本したものはオン・デマンドで手に入れることができる。そうしたなかには1600年代の資料もあり、暇にあかしてネット上で探し当てるのも楽しい。そういえばコピー機も十分でなかった著者が学生の頃、いわゆる海賊版と称した洋書のオフセット印刷ものがとても安く売られており、貧乏学生にとっては大変助かったものである。我が国でも国会図書館が中心になって漸くいろいろな資料がアーカイブ化されるようになった。我が国政府もこのアーカイブ化にしっかりと予算をつけ世界に公開することが、結果的に我が国の文化や伝統に大きく貢献することになると認識すべきである。

徳川幕府末期、オランダを通じて多くの工業技術情報は入ってきた。G.J. Verdam原著、箕作阮甫翻訳、『水蒸船説略』(1849年)がその典型であり、伊東玄朴らによるU. Huguenin原著『ロイク王立鉄製大砲鑄造所における鑄造法』(1850年頃)、各種の書籍(おそらくオランダ語)に基づいて記述された川本裕軒の『遠西奇器述』(1854年)などが著名である。これら書籍の蒸気機関および蒸気船に関する記述が我が国の蒸気動力技術の濫觴になったのは間違いもない。オランダ語に堪能であれば容易に翻訳できるというものではなく、技術そのものにもある程度の理解がなければこれら専門書の執筆はできなかったと思う。現物も国内における実績もほとんどなかった時期に翻訳ができたことに驚嘆する。

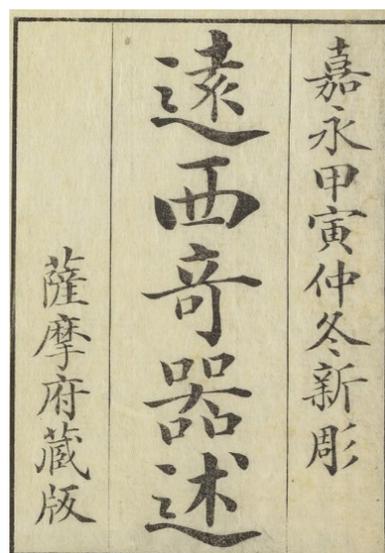
翻訳に際して、それまで日本語になかった概念や機器の名称などには、新たに専門用語があてはめられた。例えばボイラを表すのに「汽罐」、ポンプは「唧筒」などもその類ではないだろうか。どことなく形をイメージできる命名である。その意味で一般の人の教育には当然ながら翻訳が最も重要で、それによって機器機関の技術が広く理解されるようになったと思う。

逆に難しい学問の体裁をとるためなのか、philosophyを「哲学」と訳したために、人間や自然、世界、社会などの基本的な理解の仕方といった内容が背後に隠れてしまっている例もある。あるいは例えば「リスク」などは、白と黒の間で灰色決着をつけることだといえれば受け入れられなくなるためか、riskを翻訳せずにそのまま「リスク」と呼び、単に危険な事象という意味までも含んでしまっている。翻訳にはこういった場合・事例が少なくない。

我が国で本格的な工学教育を始めたのが1873年設立の工部大学校である。その都検(教頭, Principal)であったHenry Dyerが設定した講義では、彼の師であるWilliam Rankineの“A Manual of the Steam Engine, and other Prime Movers”が使われていたが、帝国大

学令によって工部大学校が帝国大学に吸収された以降は『蘭均氏汽機學』（1885年）という翻訳に替わった。同様なことは他にもあり、東京大学理学部教授であった冶金学のCurt Nettoの講義録が『涅氏冶金學』（1884年）なる書籍としていずれも文部省編輯局から出版されている。この頃からではないだろうか。こうした専門書の翻訳が一般的になりすぎて、だんだん原語で資料や書籍を読むのを厭うようになっていったのは。

今は小学校から大学に至るまで少なくとも英語は学び続けていて、幕末や明治の初めに比べてはるかに組織的に系統だって英語を学んでいる。それにも拘らず、大学生に原著を読めと言った時の彼らの抵抗感は何だろう。著者は、英語以前に国語力が決定的に欠けていることが原因ではないだろうかと思っている。国語力の欠如は人文社会分野にとどまらず、数学、物理、工学技術にも重大な影響を与える。人間も動物も頭脳を有しており我が家の黒柴嬢でさえかなりの言葉を理解する。哺乳類の中で記憶のみならず記録の道具を有しているのは人間だけであり、文字そのものが文化の根源であるというのに、それをないがしろにするのはいかなるものか。



『遠西奇器述』（京都大学附属図書館所蔵）部分